

2013年度 活動報告



特定非営利活動法人
パルシック

パルシック (PARCIC) がめざす世界

背景

私たちの生きている21世紀の世界は、さまざまな矛盾に満ちています。前世紀以来の工業化や近代化の結果、経済的な格差の拡大、天然資源をめぐる利権と乱獲、環境破壊が深刻化して、局地的な戦争の多発、民族抗争の激化などを引き起こしています。それに加えて、自然災害などの被害も大規模化しています。

アジア太平洋資料センターは、1973年の設立以来35年間、第三世界の人びとと対等平等な関係をつくり出すことを目的としてきました。自らが変わり、日本を変えることを通じて、第三世界の人びとと共に生きていくことをめざし、その時々々の必要性に応じてさまざまな活動分野を担ってきました。

90年代後半からは、具体的な現場活動として、民際協力分野を模索し始めました。タイの河川流域での環境保全・住民のネットワーク組織を手始めに、1999年のインドネシア国軍・民兵による暴虐に対抗しようとした東ティモールへの協力活動をもってこの分野での活動を本格的にスタートさせました。さらに2002年のスリランカにおける停戦合意という事態を受けて、少数民族の居住地域である北部の漁民支援を始めました。パルシックのめざす世界も、これまでアジア太平洋資料センターが取り組んできた活動経験を基礎にして、その延長線上に展開します。

理念

新たに発足するパルシック (PARCIC = PARC Interpeoples' Cooperation = PARC 民際協力の意味) がめざす民際協力は、地球上の各地で暮らす人びとが国民国家の壁を乗り越えて、直接的に助け合う世界です。同じ時代に共に生きる人間として、相互に支え合う道を拓きます。いうまでもなく、主権国家相互の国際関係、その連合組織としての国際機関などを無視することはできませんが、直接的かつ自然的な関係であると同時に人間的で対等な関係作りに参画します。

眼前の世界の現実には、異なった地域に暮らす人びとが、自ら当事者として取り組み、共同作業することを求めています。違った体験を持つ多様な人びとが、多角的な視点から、多重に多元的に協力してこそ、新しい主体を形成できます。老若男女の地域住民が社会の主人公として、自分たちの生き方を決め、豊かな暮らしを築く世界をめざしましょう。

手段・方法

そのような世界へ至る手段は、ひとつだけではありません。異なった条件のもとでは、異なった対応が必要です。人間社会のもめごとには、多くの要因や相互作用が絡んでいます。それを解きほぐすには、丹念な探究が不可欠です。私たちは、地域の現実に即した調査活動を行います。そして積極的な解決案を模索します。

いかなる紛争の現場にも、暴力の匂いが付きまっています。あらゆる戦争が軍事力の行使である以上、パックス・ロマーナに始まる世界の歴史が示すように、世界の平和もまた軍事力によって達成されると信じられてきました。しかしながら、パルシックはそのような手段を採用しません。非暴力的な方法による、紛争解決の道をめざします。

私たちは、必要とあれば紛争の現場に赴き、その歴史的社会的な背景や問題点を関係者から丁寧に聴き取り、いかに特殊な問題であっても具体的な生活の課題に即した解決案に取り組みます。その方法は、武力抗争の対極にある、交流、交換、交信、交易などの営みです。

パルシックの活動は、直接的な交流、交易を重視します。商品の生産、流通、消費などが、市場の価格だけを判断基準にするのではなく、人間的な交流と信用に基づくことを大切にします。交換を通じて、商品だけでなく双方に欠けているものを互いに補います。そして、できるだけ多くの交信手段を使って相互理解を深めます。交易も、「すべての当事者が対等な立場から適正な利益を得る」フェア・トレードに力を入れます。このような活動こそ、民族抗争や地域紛争が引き起こす民衆の困難を解決する道だと信じるからです。

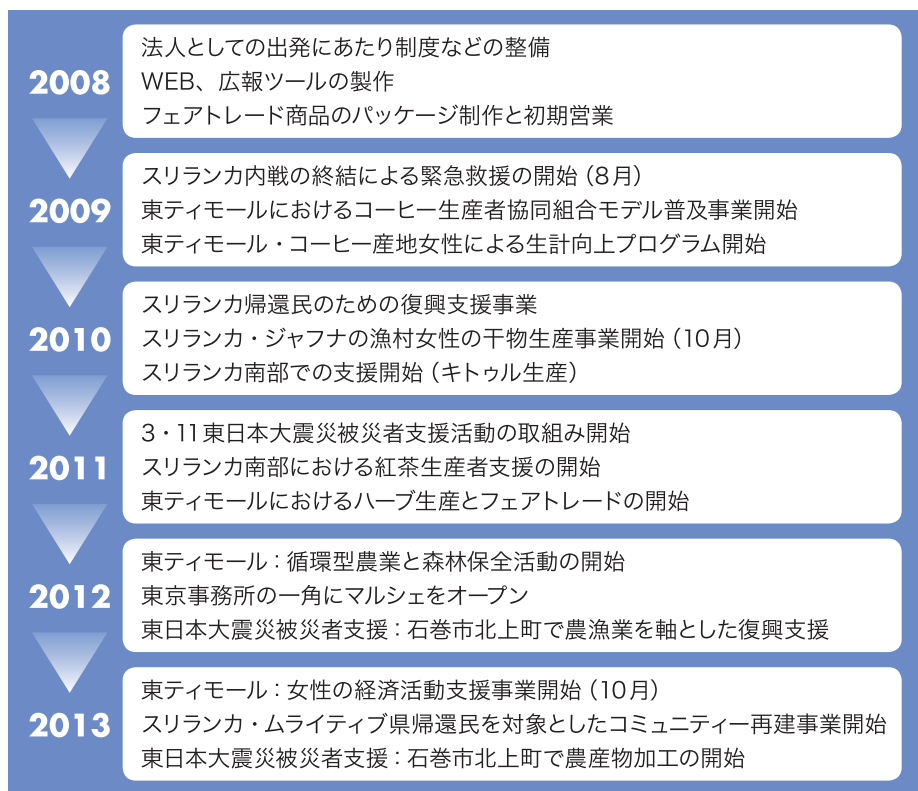
これまで土地売買の自由化、低賃金労働力の国際移動、そしてなによりも金融市場のグローバル化が、凶悪な力となって、人びとの生命と暮らしを破壊してきました。そのような潮流に対して、パルシックの活動は、「暴力と戦争」から「対等な交易と協力」への方向転換をめざします。

はじめに……………	2
東ティモール……………	4
1 コーヒー事業の現状……………	5
2 循環型農業事業……………	6
3 女性支援事業の開始……………	7
スリランカ……………	9
1 ムライティブ県でのコミュニティ復興事業……………	9
2 ムライティブの子どもたちへの文具を配布……………	10
3 ジャフナ県での干物事業の終了とこれから……………	10
4 ジャフナ県：養殖事業の開始……………	11
5 サリー・リサイクル事業……………	12
6 南部デニヤヤでの紅茶事業……………	13
東日本大震災復興支援……………	14
1 仮設居住者による農業および食品加工支援事業 ……	15
2 水産物の販売支援……………	16
3 復興応援隊の活動 ……	17
マレーシア……………	18
ペナン島での植林事業の継続……………	18
人と暮らしに出会う旅……………	19
フェアトレード……………	20
広報……………	22
パルシック各事務局写真……………	23

はじめに

2013年は、パルシックは設立（PARCとの業務分割）5周年を迎えました。2013年度も忙しく駆け抜けた1年でしたが、徐々に組織としての基盤ができつつあり、東京事務局も力をつけてきたことを実感します。そして未熟なパルシックを多くの方々に支えて頂いたことを実感し、感謝しています。まずは会員として支えてくださっている方々、寄付を寄せてくださる方々、東ティモールのコーヒーやハーブティー、スリランカのアールグレイ紅茶やウバ紅茶を販売して下さる企業やご愛飲して下さる方々、事業を支えて下さる助成団体、そして事務局の日々の活動を助けてくださっている印刷屋さん、WEBデザイナーさん、民際ニュースのレイアウトをして下さる方々……。この方々のご支援、ご協力がなければ、パルシックの活動は成り立たないと感謝の気持ちを新たにしております。パルシックの「めざすもの」の「地球上の各地で暮らす人々が、国民国家の壁を乗り越えて、直接的に支え合う」という理念を言い換えると、「みんなで一緒に食べていかれる社会を築くこと」と考えており、事業や販売などなどで出会った人々との出会いを大切に、ともに生きていくネットワークを国境を越えて、そして日本の中でも身の回りにも築いていきたいと考えています。

6年間のパルシックの歩み

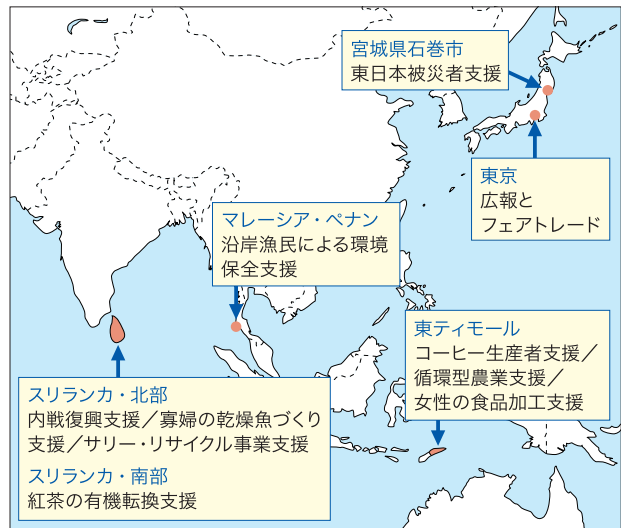


【東ティモール】 パルシックにとってはコーヒー事業を開始して11年目となった東ティモールでは、2013年から東ティモール全体を視野に入れ、コーヒーだけではない事業の広がりを作り出すというチャレンジを開始しました。

- **コーヒー生産者支援事業** 東ティモールでの活動の柱はアイナロ県マウベシ郡とエルメラ県サココ集落で展開しているコーヒー生産者支援事業です。コーヒー生豆価格が国際的な低下傾向に向かう中、コーヒー生産者の生活を支えつつ、品質を維持していくために苦闘しています。
- **女性の経済活動支援** 東ティモール全土を視野に入れて、各地でそれぞれ地元の食材を生かした食品加工を行う女性たちを支援して、マーケティング、パッケージ、輸送などの問題を解決するという事業を開始しました。いわば東ティモール版農村女性の起業支援です。5年間かけてじっくり課題に取り組もうと考えています。

- バイオガスの導入 循環型農業と森林保全事業では、2013年にいよいよバイオガスの導入を開始しました。まず2基を建設しましたが、なぜかガスは発生せず。2月に専門家に来ていただいて、パイプのねじれが原因であったことが判明。まだまだ試行錯誤しながらも、新しい経験に挑戦しています。

【スリランカ】北部ジャフナでは、内戦の終結（2009年5月）から間もなく5年が経過しようとしており、経済開発が本格化しています。他方、内戦末期で戦場となったムライティブでは国内避難民の帰還が完了した段階で、復興は緒に就いたばかりです。



- ジャフナ 2010年10月に開始したジャフナ県での漁村女性を対象とした干物事業は2013年9月に予定通り終了しました。終了と同時に、2013年10月から養殖事業を開始しました。ジャフナ県沿岸の水産資源の枯渇を懸念して、持続可能な漁業のあり方を探るためです。また干物事業に参加していた女性たちとサリーのリサイクル事業も継続実施しています。
- ムライティブ 昨年度末に開始した帰還民のための井戸掘削事業は合計18基の井戸を建設して2013年8月に終了。9月からはコミュニティ再建支援の第一歩として3つの漁村でコミュニティセンターの建設を開始しました。
- デニヤヤ 紅茶の有機栽培を行っているデニヤヤでは、事業地の近隣の農家さんたちも有機栽培に関心をもたれ、現在の60世帯の農家による茶葉の有機栽培を100世帯以上に広げる基盤ができていますが、パルシクの力不足のために未だ、60世帯の農家による有機栽培を継続し、2013年度は5トンの紅茶を出荷しました。

【マレーシア】ペナン島の沿岸漁民支援を開始して4年が経過しました。日本ではあまり知られていませんが、沿岸漁民団体PIFWAは地道な環境保全活動を続けています。2013年には女性グループも立ち上げました。

【石巻市北上町】石巻市北上町でパルシクが支援を開始して2年余が過ぎました。この間、住民の皆さんから教えられ、助けられることの方が多かった支援活動でした。2013年度はそんな北上町の魅力を多くの方たちと共有するために3回のツアーを実施しました。

【東京事務所】2012-13年コーヒーの収量が100トンという例年にない水準に達し、営業活動を本格化せざるを得ませんでした。まだまだ在庫を抱えています。販売する力をつけることが広報活動とともに継続した課題となっています。そのために国際食品・飲料展への出展など新しい試みにチャレンジしました。2013年度は4件の現地訪問「人と暮らしに出会う旅」を成立させたほか、10月にはスリランカ映画の上映会も開催し、事業報告やフェアトレード商品だけではなく文化を含めて日本社会に伝えていく重要性を認識し、今後も継続したいと考えています。

基礎作りの6年間を終えて、これからパルシクの特徴を一層鮮明にしながら活動分野や地域も広がっていきたい所存です。

パルシク理事 井上 礼子
清水 研
鈴木 直喜
永田 洋子
中村 尚司
穂坂 光彦

2012年12月末、国連東ティモール事務所は予定通り粛々と事務所を閉鎖し、撤退しました。99年の住民投票以来、東ティモール独立の道筋に立ち会ってきた国連の存在が完全になくなり、特に治安の面では緊張感をもって、東ティモールの2013年は幕を開けました。

振り返って、大きな混乱もなくこの1年を乗り切ったことはこの国の大いなる成果でした。2011年の開店時には先行きが心配された首都の民間ショッピングモール「ティモールプラザ」に、平日の昼間から大勢の若者が集まり、手に手にノートパソコンを抱えてWi-Fi接続を利用していたり、一食4～5ドルはするフードコートが昼食時には東ティモール人で埋まっていたりという光景を眺めると、この国は、2030年に上位中所得国を目指すという「戦略的開発計画」に沿って、順調に発展しているように思えます。

一方で、この人たちはいったいどうやってそれだけの収入を得ているのか？という疑問が湧きます。毎年、1万5,000人が新規就労人口に加わり、しかしながらそれを吸収できる雇用の場はありません。ポルトガル旅券を手に入れて親戚を頼りにイギリスやアイルランドへ出稼ぎに出る若者はいまも後を絶たず、韓国政府は研修制度を設けて東ティモールの若者を韓国の労働市場へ送り込んでいます。

ティモールプラザの華やきは、石油収益から所得を得る一部富裕層の恩恵に与った現象で、圧倒的多数がこの別世界を指をくわえて眺めています。国連撤退により、売上が3割に減ったというディリ海岸沿いのレストランの実態が、より現実を反映しています。社会不安による若者の暴動はなくなりましたが、一方で、組織犯罪、殺人事件、カトリックが多数を占める東ティモールでは考えられなかった自殺の件数が増えるなど、社会の歪みは形を変えて表出しています。

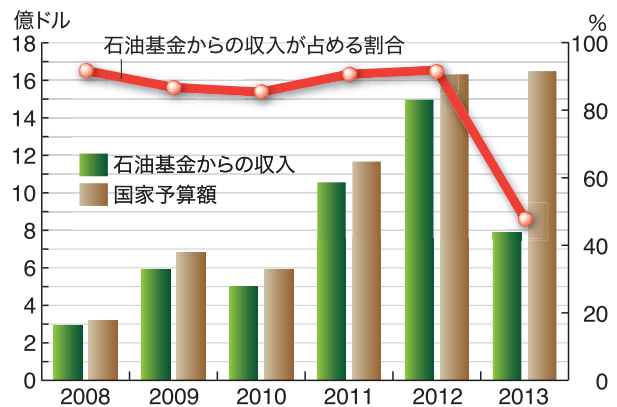
圧倒的多数が心穏やかに、貧しさに苛まれることなく暮らし、そのことが国全体としての安定につながる社会が、東ティモールでも求められています。

首都ディリにあるティモールプラザのフードコート



東ティモールの石油依存財政について—現地 NGO (Laò Hamutuk) の分析レポートから—

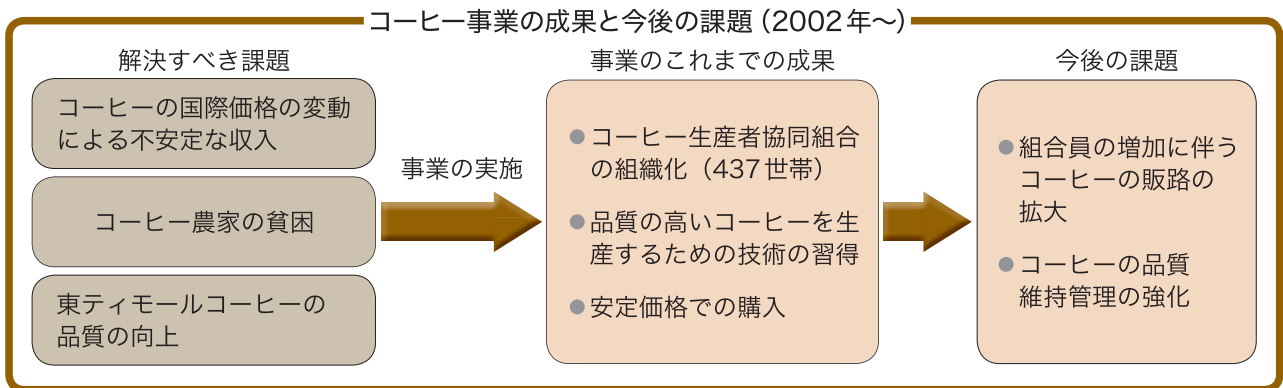
東ティモールは領海内に、オーストラリアとの共同石油開発区域を有しており、国家財政は石油収入に大きく依存しています。石油関連の収入は国の歳入の約90%、GDPの80%に達しています。石油収入が積み立てられる石油基金には現在150億ドルの資金があり、たとえ石油資源が枯渇しても将来的にもこの収入から国家歳出は賄われようと多くの人が信じています。しかし、このままの歳出をつづければ、2025年にはこの石油基金が枯渇してしまう可能性もあります。石油収入外の東ティモール経済はとても小さく、高いインフレ率や対外債務の増加、非石油部門以外の産業が未発達なことから、同国は輸出の33倍の額を輸入しています。石油収入にこのまま依存していくだけで他の産業が育たないままに石油収入が尽きてしまうと、現在ですら貧しい生活下に置かれている国民の多くは、さらに貧困に陥ることになってしまいます。



(出典) Ministry of Finance, Timor Leste

(注) 2013年度の石油基金からの収入は前年度比で半減しています。これは2012年度には外国の油田開発会社による滞納金収入があり、2012年度为国家歳入が過去最大となり2012年度末の国庫金の剰余金が約8億ドルに上ったためです。その結果、2013年度の予算には前年度の剰余金も充てられ、石油基金からの収入は約7.9億ドルと予算の半分以下にとどまりました。

1. コーヒー事業の現状



2013年はマウベシ・コーヒー生産者協同組合コカマウ (COCAMAU = Cooperativa Agrikultura Moris Foun Unidade Kafe Nain Maubisse) からアラビカを80トン、サココ青年組合コハル (KOHAR = Kooperativa Hamriik Ho Ain Rasik 自分の足で立つ協同組合 = 自立発展協同組合) からロブスタを29トン出荷しました。

コカマウはメンバー数を302世帯から437世帯へと大きく拡大しました。2011年の国際コーヒー市場価格の暴騰を境に、東ティモールでもコーヒー価格は下落し続け、買い取り価格が高い市場としてコカマウへの加入を希望する農家が増えています。悪路の先に点在する18集落で、437世帯のコーヒー加工を管理、モニターすることは至難の業です。実際に今年度は一部集落の品質が基準に達しないため、シーズン中にもかかわらず買付を中止しました。良いものには良い価格を、の方針に疑義が生じないように、また拡大し続ける組合へのニーズに応えるべく新たな市場を開拓するためには、品質管理体制を見直すことが急務です。

2013年にはコカマウ、コハルともに、フェアトレード市場から還元されるソーシャルプレミアムを資金に、



コーヒーの加工作業をする人々



社会事業を立案、実施しました。コカマウは遠い水源から集落近くまで水を引く事業を4集落で実施、コハルは、集落内の急病人を10キロメートルほど山を登った先にある診療所までバイクで搬送するモバイルクリニック事業を実施しました。社会事業がはじまったことで組合の役割が再認識され、組合員の生活向上への期待は膨らんでいます。

(東ティモール事務所代表 伊藤淳子)

コーヒー生産者の声

ヴィットリーノさん (ルスラウ)

コーヒーの品質改善に取り組んで10年以上が経ちました。コカマウのメンバーは増え続け、一方で品質に課題が発生しています。2014年度は品質管理の原点に立ち返り、日本以外の市場にも出荷できるようにしたいと思います。

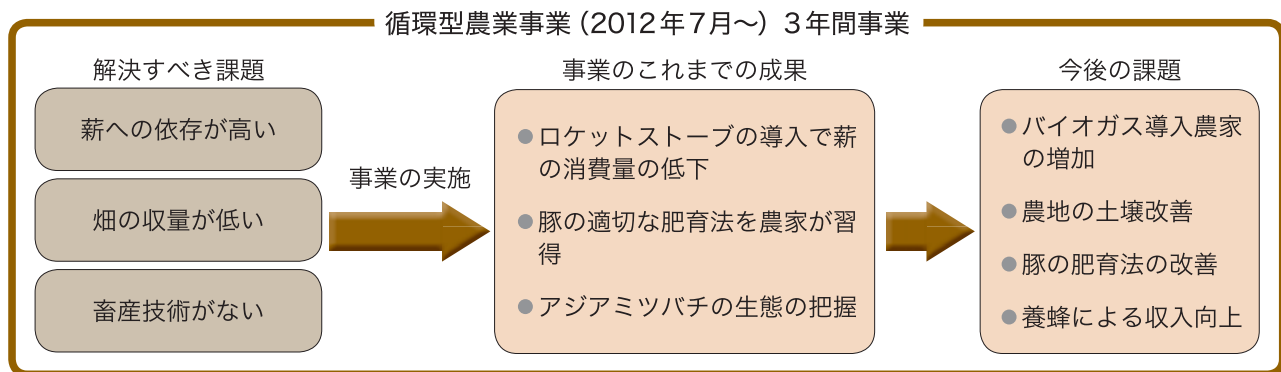


ベルナルドさん (ルムルリ)

2013年はコーヒーの収量があまり多くなく、価格も下がって大変でした。コカマウを通じて出荷することで、コーヒーの売上だけでなくソーシャルプレミアムが得られ、水タンクが設置されて水が近くで得られるようになって助かっています。



2. 循環型農業事業



「山間部農民の生計向上事業」は、東ティモールの社会経済状況に適合した森林保全型農業のモデル集落の確立、並びに農民の生計向上を目指して3年計画で実施しています。2013年9月から始まった2年次では、①養蜂、②養豚、③バイオガスの3つを事業の柱として活動しています。

(1) 養蜂

ハチミツは東ティモールの特産品の一つです。一般的に出回っているハチミツは、大木の樹上に巣をつくるオオミツバチの巣から採取したのですが、養蜂事業ではより品質の高いハチミツを生産するアジアミツバチの養蜂に取り組んでいます。事業開始当初は、アジアミツバチの生態そのものに関して分からないことも多く、地域住民の協力を得て生態や蜜源植物の調査をしながら、分蜂群（巣別れ）を取り込むための巣箱設置を進めてきました。アジアミツバチのハチミツは首都デシリでも非常に貴重で高価に取引されています。薬効も高いこの貴重なハチミツを、養蜂で安定的に生産できることを目指しています。



竹の筒に巣を作るアジアミツバチ

(2) 養豚

養豚事業では、自己資金によるマイクロクレジットを実施し、参加世帯が養豚用の子豚を購入できるようにしました。排出される糞はバイオガスの原料としても利用する計画です。養豚技術改善の一環として、エサの与え方に関する指導を中心にワークショップを実施しました。これまで生のまま与えていたエサを加熱することで、豚が消化しやすくなるように指導するとともに、鶏糞を農地に投入することで作物収量の増産指導を行いました。

豚用のエサの加熱は1年次に配布したロケットストーブを使っている世帯が多く、1年次の薪削減事業と今回のワークショップの効果が現れています。



マイクロクレジットを利用して購入された子豚

(3) バイオガス

薪使用量の削減と農地への液肥利用を目的とするバイオガス事業では、各集落でモデルプラントの設置を進めています。プラントを設置した一か月後のモニタリングでガスの発生を確認することができました。勢いよくガスが出て調理に利用できた時は、ティモール人スタッフとともに感動を覚えました。モデルプラント設置世帯主のジョアオ氏からは「配管からガスが漏れて家が火事になってしまうのではないか」との不安がこぼれましたが、適切な使用方法を伝え、不安を解消しています。初期原料投入時に大量の水を必要とすることから、設置が可能な世帯が限られてしまうのが残念です。今後はバイオガスプラントの設置に加えて、ガスや副産物の液肥を使った生活状況改善に向けて事業を進めていきます。

(循環型農業担当 高橋茂人、宮田悠史)



バイオガスプラント共同制作の様子

(この事業は日本NGO連携無償資金協力の助成を受けて実施しました。)

3. 女性支援事業の開始

女性事業の課題 (2013年10月～)
〈5年間事業〉

解決すべき課題

市場へのアクセスと輸送手段

パッケージ資材の入手困難、パッケージの改善

商品の品質改善

2013年10月から、5年に亘る『東ティモール農村女性による経済活動支援』事業がスタートしました。農村女性グループによる地域特産品を活用した生産活動が進展し、女性たちへ収入向上がもたらされることを目標としています。

女性に焦点を当てたきっかけは、コーヒー事業を通して出会ったコーヒー農家での、女性の地位の低さ、発言権のなさを感じたことでした。農村で女性たちは家事や育児、農業もおこなう働き者です。しかし一家の収入の使い道は多くの場合男性が決め、そしてその多くが冠婚葬祭やたばこなどの嗜好品に充てられています。家族の健康、子供の健やかな成長を思う女性が、家族のために使えるお金を増やすためには、女性が直接収入を得ることが必要だと考えました。

当事業の前段階として、2008年からマウベシ地域で



食品加工作業をするアイレウの女性グループ

コバリマのグループを訪問して聞き取り調査



東ティモール

女性グループのハーブティー生産支援を行ってきました。これまで収入のなかったコーヒーのオフシーズンに少額の現金収入をもたらし、わずかですが継続的に収入を得ることで生活が少し良くなり、女性たちの自信につながりました。女性たちがイキイキと活動する様子を男性たちも嬉しそうに見ています。家庭内での発言権の向上につながったと感じます。

本事業ではマウベシの経験を他県の女性グループにも広げ、東ティモール全土の女性の収入向上、そして人々の生活向上を目指します。そのためにグループ同士、またはその地域にある他の団体と女性グループをつなげ、グループにある共通課題に取り組んでいきます。パルシ

ックがマウベシ以外の県で活動するのは初めてです。それぞれの県にあるローカル NGO とも協力し、その地域のなかで問題解決できるネットワークづくりを重視します。そしてそれが地域の生活改善モデルとなり、そのインパクトがゆくゆくは国全体におよぶことを願っています。事業が始まった2013年10月から、女性グループを訪問して聞き取りを行い、これまでの活動や現在抱える課題についての調査を開始しています。

(女性事業担当 伊藤淳子、鈴木桃子)

(この事業はJICA草の根技術協力パートナー型の支援を受けて実施しました。)

女性支援事業の事業地



グループ活動をしている女性たちの声

ジョアニナさん (グループ・レウ：パウカウ県)

トマトソースとバナナソフトキャンディを生産していますが、月々の利益が少ないため、これまで一度もメンバーに賃金を配分できていません。それなのに活動を続けているのは、集まって活動するのが楽しく、ビジネスをすることに誇りを感じることで、夢と希望があるからです。

フィットウンナロマン・グループの女性たち



レウ・グループの女性たち

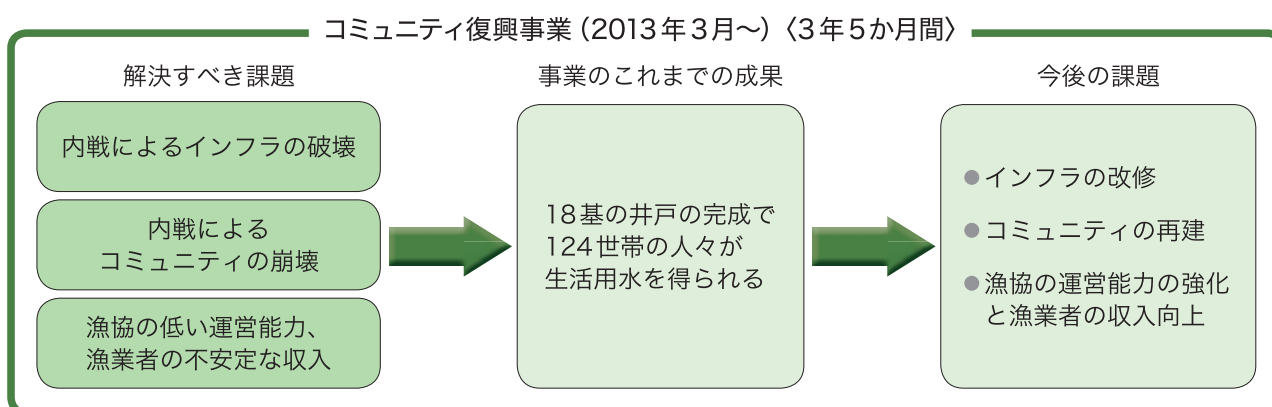
ルシアさん (フィットウン・ナロマン：コバリマ県)

これまでではタイス (伝統織物) のみを作っていました。販売は外国人観光客が来た時だけで、収入の予定が立たないため他の製品を作り家計を助けたいと思っていました。地域では魚が多く取れます。その干物で“ふりかけ”を作れると聞きました。他の原材料生産グループと協力し、新たな製品開発でわずかでも継続的な収入を目指したいです。

2009年5月の内戦終結から5年が経とうとしているスリランカ。北部ではジャフナを中心に経済開発が進み、新しい商業施設が次々と建設されると同時に、内戦中に破壊されたコロンボと北部を結ぶ鉄道復旧建設がギリノッチまで完成し2014年前半にはジャフナまで到達する予定です。こうしたインフラ面での復興が進むなか、2013年9月には25年ぶりとなる北部州議会選挙*が行われ、ソフト面でも内戦後のスリランカ政治にとって大きな一歩を踏み出しました。結果はタミル人政党の圧勝となりタミル人の自治権強化への期待を反映した結果となりましたが、北部での中央政府の権限が強い中、いまだ北部州議会は権限を発揮できていません。他方で、国連の人権理事会は2012年、2013年に、内戦中の戦争犯罪についてスリランカ政府に調査究明を進めるよう求めています。調査は行われておりません。また、北部には南部から多数の観光客が訪問しているものの、言葉の壁もあって、北部の人と南部からの観光客が交流する機会はなく、南北の人々の実質的な相互交流、民族間の交流は進んでいません。

* 25年前の1988年は北部州と東部州が分かれていなかったため、北東部州議会選挙として実施されました。

1. ムライティブ県でのコミュニティ復興事業



ムライティブ県マリタイムパットゥ郡の4村で、計18基の共有井戸を建設しました。内戦が始まった1980年代以来、約30年ぶりにほぼ初めて自らの土地に戻ってきたという人もいるこの地域。内戦前は各戸にあった井戸は破壊され、もしくは老朽化してしまい、帰還後に支援された細い管を埋めたチューブ井戸を隣家と共有で使っている人がほとんどでした。2013年3月から8月

までの5か月間の事業で、戻ってきたばかりの人々(計124世帯)に日々の生活にとって重要な生活用水源を提供することができました。9月以降は引き続き、同地域で住民が利用するコミュニティセンターの建設を行っています。(ムライティブ事業担当 伊藤文)

(この事業は日本NGO連携無償資金協力の助成を受けて実施しました。)



建設された共有井戸を使う女性

井戸を使っている村の人々の声

パーヌマディさん (コクトルワイ村)

内戦で姉、夫を亡くし、今は姉の配偶者とお互いに助け合いながら暮らしています。姉夫妻は、内戦末期の爆撃で子供たちも亡くしており、残された義兄は今もそのことを思い出して泣くことがあります。自宅近くにあるチューブ井戸を使っていたが、毎回手で扱がねばならず腕の痛くなる重労働でした。共有井戸ができてからは作業が楽になり、飲用、浴用、炊事洗濯と、すべての用途にこの井戸を使っています。



スプラマニヤムさん (コクライ村)

2011年に村に戻って来ました。国内避難民キャンプに滞在していた2009年に息子が外出して姿を消したきり今も消息が分からないままです。新しい井戸の近くに1.5エーカーの土地を持っており、キャッサバ、唐辛子などを育てています。井戸の水は飲用や浴用の他、この菜園にも使うことができ、とても便利になりました。

2. ムライティブの子どもたちへの文具を配布

ムライティブ県ブドゥクディルプ郡、マリタイムパットゥ郡にある13校、計3,200人の生徒さんに、1年分のノートを寄付しました。パルシック事務所を訪ねてきたブドゥクディルプ出身の大学生からの要請で始まったこのプロジェクト。パルシックの支援者の方々を中心に声をかけ、9月からの5か月間で総額482,140円のご寄付をいただきました。戦禍の影響を直接受けた両郡の学校では、帰還後教室に戻った子どもたちの家庭環境は厳しく、文具を揃えることができないばかりか、朝食を食べさせることもできず、学校での昼食が一日の主な食事という子もいます。

一人当たりの配布量

1-2年生	一般科目用4冊、数学用1冊
3-5年生	一般科目用3冊、数学用1冊、英語用1冊
6-8年生	一般科目用9冊、数学用1冊
9-11年生	一般科目用9冊、数学用1冊



ノートを受け取って嬉しそうな子どもたち



ノートを受け取るヴェナヴィル小学校の子どもたち

3. ジャフナ県での干物事業の終了とこれから

2010年10月から実施していた「ジャフナ県乾燥魚事業」が2013年9月末で終了しました。この間、ジャフナ県の6村で76人の女性たちの継続的な参加を得て、多くの女性たちが目標だった5,000ルピーの月収を得られるようになりました。事業で得た現金収入を女性たちは家族のために使ったり、貯金したりしています。ある女性は自宅に井戸を建設し、ある女性は娘の結婚資金の

ために貯金し始めました。しかし、2013年度はジャフナ県全体で不漁がつづき、干物作りのための魚を得られない日がつづきました。こうした不漁時にも女性たちが収入を得られるように、食品加工やサリー・リサイクル事業のような縫製仕事など、他の仕事も取り入れてきました。同時に、漁村の収入源が「獲る漁業」のみに依存しなくてよいように持続可能な漁業のための養殖事業も

開始しています。事業終了後も魚が獲れるときには漁村のお母さんたちは干物作りを行い、パルシックは引き続きお母さんたちの干物販売を支援したり、相談に乗ったりと、漁村の女性たちとのかかわりをつづけていきます。

(干物事業担当 西森光子)

(この事業はJICA草の根技術協力型パートナー型の支援を受けて実施しました。)



ウドットゥライ村の女性たち

4. ジャフナ県：養殖事業の開始

2013年10月から、持続可能な漁業を目指してジャフナ県で養殖事業を開始しました。内戦の影響でスリランカ北部には大型漁船などがなく沿岸での漁業に集中しているため、沿岸資源の枯渇が懸念されています。こうした状況を改善できるよう、ジャフナの漁師さんたちと水産資源の保全について話し合いながら養殖の導入を行う、3年間の養殖事業を始めました。最初の一年間は文献や養殖場の視察による調査を行い、2年目に養殖設備の設置、養殖の実施を行い、3年目に養殖で育った海産物を



養殖事業(2013年10月～)3年間 解決すべき課題

大型漁船がなく、沿岸部での漁業に集中

養殖に関する知識や技術がない

漁業資源の枯渇への懸念

販売し漁師さんの収入向上につなげる計画です。この事業のために、新たに雇用したアジャンタというスタッフは、大学・大学院と漁業や養殖について学び、その後、養殖に関わる職業に就きたいと応募してきた意欲的な女性です。10月から同スタッフを中心に、調査を進めています。また、2014年1月には日本人専門家が現地調査を行った結果、ジャフナで可能な養殖種としてナマコ、海藻、エビが候補にあがりました。引き続き現地での調査を進め、2年目での養殖の実施につなげます。

(養殖事業担当 西森光子)

(この事業は三井物産環境基金の助成を受けて実施しました。)

◀ナマコ養殖の調査をするアジャンタ

シネマカフェ の開催



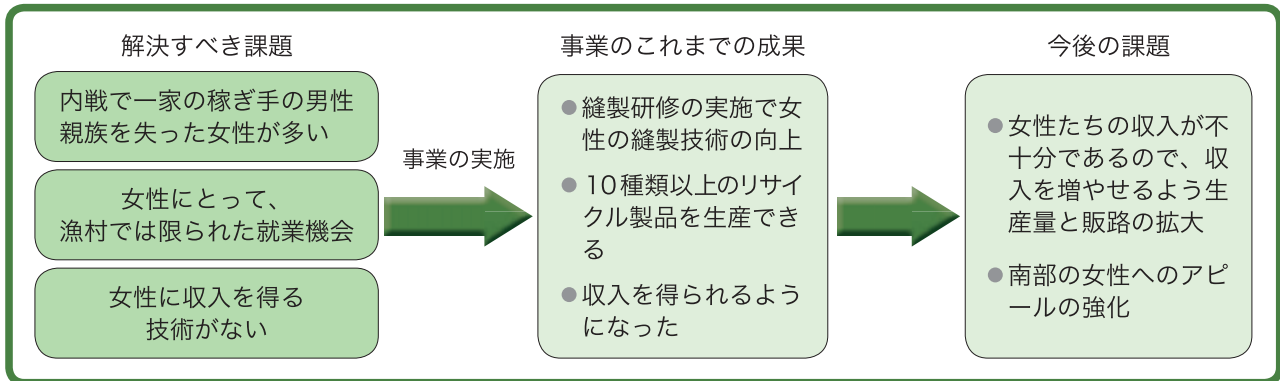
歴史・文化を知ることができ、事業内容の理解がより深まった」との感想を多くいただきました。映画館でイベントを開催したことで、普段はパルシックの活動に触れることがなかった新たな方々に、活動内容、商品を知ってもらう大変良い機会を持つことができましたと実感しています。

「パルシック シネマカフェ」は、今後も継続的に開催していく予定です。次回は2014年5月10日に東ティモール映画の上映とフェアトレードに関するトークを行います。

2013年12月10日に、「ジャフナ県乾燥魚プロジェクト」の事業報告会をこれまでとは趣向を変えて映画上映と活動報告を併せたイベント「パルシック シネマカフェ」の中で行いました。開催場所となった渋谷UPLINK FACTORYには月曜日の夜にもかかわらず、50名近くの方にご来場いただきました。プログラムの前半は、スリランカ内戦に翻弄されたタミル人とシンハラ人の恋愛を描いた映画「やさしい女」を上映。後半は「ジャフナの女性たちとの干物作り」をテーマに、ジャフナ県に駐在していた西森による事業報告を行いました。参加者の方々からは、「映画上映と事業報告会を併せて行うことで、事業の背景にある



5. サリー・リサイクル事業



2013年度は、参加女性の技術向上および製品開発のためのJICAボランティア2名による3か月間の研修を実施しました（2013年7月から9月まで）。一方、サリーの収集に関しては、コロンボなどの学校や会社から継続的に収集できる関係構築を進めてきました。同時に、サリーを寄付してくれる南部の女性に北部の女性の状況を伝えるため、進捗報告のレポートを発行し、南部と北部の女性をつなぐという本事業の平和構築への貢献という面も本格化してきました。また生産された製品は、コロンボ市内でのイベントに出店、同市内の店舗や観光地の土産物店などでの販売を開始しました。

（サリー事業担当 高橋知里）

（この事業は日本国際協力財団国際協力NPO助成の支援を受けて実施しました。）



コロンボの小学校から寄贈されたサリーを受け取るパルシク・スタッフ

参加女性の紹介



ラジャーニさん（トゥンパライ村）
パルシクが2013年まで実施していた乾燥魚事業にも参加しており、乾燥魚販売による収入に加えて、サリー事業による収入で家計を支えています。サリー事業による収入で6人の子供の教育費をまかなえるようになりました。

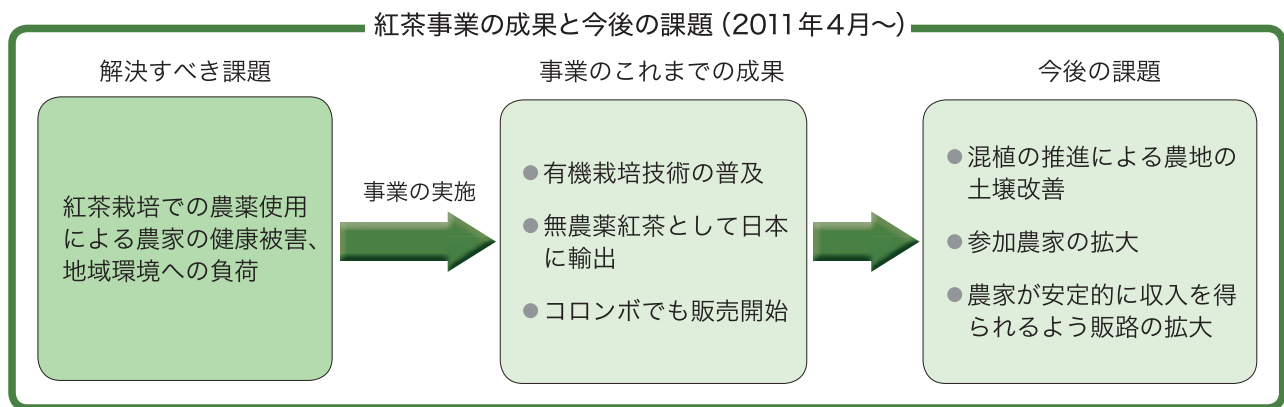


カマリニさん（ウドウトウライ村）
これまでミシンをあまり使ったことがありませんでしたが、世帯主である母親を支えるため、この事業の縫製指導によって技術を上達させてきました。彼女の村にはまだ電気が通っていないため、製品の最終仕上げのためのアイロンかけ作業を自宅で行えないのが不便なところです。

事業の協力者に事業の進捗を伝えるレポートを定期的に発行



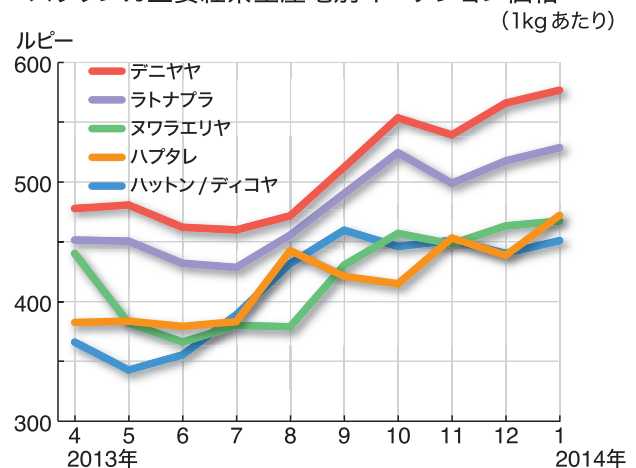
6. 南部デニヤヤでの紅茶事業



2011年から開始したデニヤヤでの有機紅茶転換事業は3年を経ました。今年度は新たに10世帯の農家をメンバーに迎え60世帯となりました。これまでは、まず、参加メンバー自宅に有機堆肥を作るため、各世帯に1頭の牛を配布してきましたが、有機転換には興味があるが牛の世話は困難な農家がいるという声を多く聞いてきたので、今年度は10世帯中6世帯には牛を配布する代わりに、既存メンバーが作る余剰の堆肥を配布しました。今年度は特に、メンバーの知識や技術を深められるよう、南部州のルフナ大学や政府紅茶研究所などに協力を得た研修やグループの組織力の向上を目指した研修などを重点的に実施しました。土壌改善に向けて各農家もそれぞれの工夫を凝らしていますが、いまだ生産量は化学肥料を用いた慣例農法に比べると少ない状況です。我慢の時間を過ごしていますが、来年度も引き続き粘り強く土壌改善を進めます。

スリランカ紅茶産業全体としては、今年は他の生産国での生産量の減少などにより、コロombo・オークションでの価格が高騰しました。この傾向はいつまで続くか予

スリランカ主要紅茶生産地別オークション価格



測がつきませんが、特に南部産の紅茶に顕著で、パルシックスも農家からの生茶葉の買い取り価格を値上げしました。地域の工場では茶葉の獲得競争が激しく経営が苦しくなっているという話も耳にします(上記のグラフ内ではデニヤヤとラトナプラが南部主要生産地)。

(デニヤヤ事業担当 高橋知里)

(この事業は自己資金で実施しています。)

参加農家の紹介



プリヤンタさん (キリウェラガマ村)

2011年の当事業開始当時からの参加者です。2年目に有機転換圃地が隣接する小川の氾濫によって汚染されてしまい、圃地を移動するという大変な目に遭いました。

その後、よりいっそう畑の管理、土壌改良に工夫を凝らしています。



サンパットさん (バタヤヤ村)

サンパットさんは、2012年度の参加から有機転換圃地を1エーカーに拡大し、研修で習得した魚オイルを活用した液肥作り・施肥をするなど、積極的に有機転換を進めています。

作った液肥は、他のメンバーの畑にも施肥したり、作り方を共有したりしています。

東日本大震災復興支援

2011年3月11日から3年間が経過しました。パルシックが活動する石巻市北上町は、1955年に十三浜村と橋浦村が合併して北上村に、1966年に北上町となった地域で、2005年の「平成の大合併」で石巻市の一部となりました。しかし、東日本大震災は、北上という地域に住む人々の結束と自助の力をしめしてくれました。歴史的に形成されてきた「契約講」という伝統的な住民自治と互助の組織が生き続けていることが、復興にあたって大きな力を発揮することを明らかにしたのです。私たちも、北上の地で働き始めてから改めて「契約講」という互助組織が祭りなどの場面だけではなく日常の生活を支えていることを知って、都市では見えない日本社会の原型のひとつに触れた気がしました。同時に、震災によって身内や家を失い、しんどい



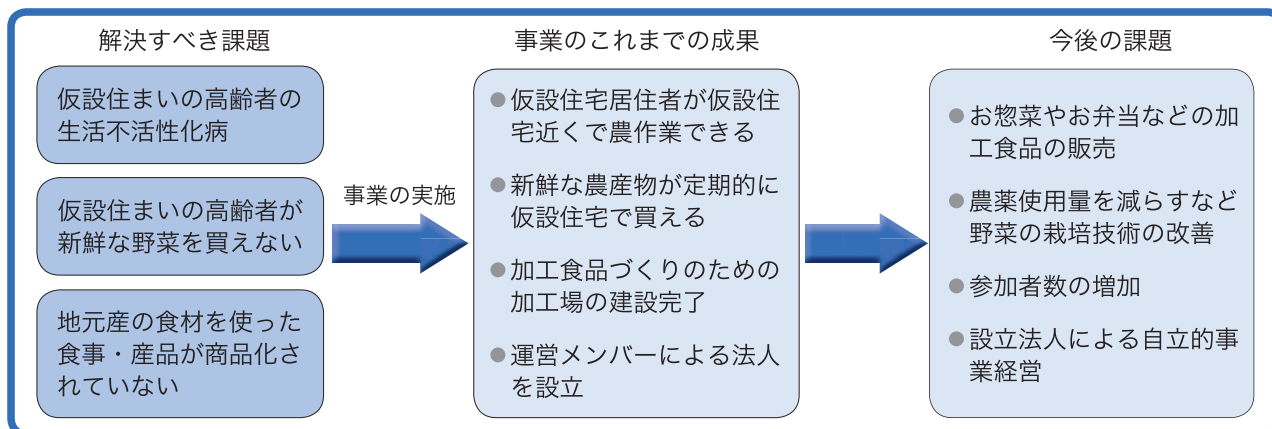
経験をしながらも助け合い、私たちをにこやかに迎えてくださる北上の方々に本当に多くの、目に見えないものを頂き、「支援する」よりも「支援されている」という思いでいます。美しい景色と美味しい食べ物、そしてさまざまな神楽や祭りにみられる伝統文化、何よりもそれを支える魅力的な人々に魅せられました。

3年を経て、北上町の風景も変わりつつあります。被災した建物や瓦礫はほぼ撤去され、堤防づくりや住宅再建のための造成用の工事車両が行きかい、人も車もすぐに真っ白になるほどの埃です。けれど被災者の生活はあまり変わっていません。北上の人口672世帯のうち522世帯が家屋全壊の被害にあっています。そのうち233世帯は今、「にっこり」と相川、大指にある3つの仮設住宅に居住しています。他は親戚の家に間借りしたり、家を一部修復したりして暮らすという生活が3年も続いているのです。3年目になると仮設住宅も狭いうえに様々な故障もでてきます。この人々の暮らしの再生のためにパルシックは2013年に下記の活動を行いましたが、同時に北上地域の復興のために何をすべきか、ということで、悩みぬいた1年間でもありました。

北上町の被災状況

	地区名	被災前		被災者(人)		被災(家屋損壊)					
		世帯数	人口	死亡	行方不明	世帯数	人数	全壊(戸)	大規模半壊(戸)	半壊(戸)	一部損壊(戸)
1	小滝	40	187	2	0	28	28	1	0	1	26
2	大指	44	191	1	0	40	181	14	0	1	27
3	小指	27	86	3	1	27	86	24	0	0	3
4	相川	98	276	8	1	92	262	55	0	1	36
5	小泊	11	50	1	0	11	11	8	0	0	3
6	大室	50	185	7	8	50	185	48	0	0	2
7	小室	30	117	2	2	25	117	18	4	0	8
8	白浜	44	167	11	16	44	167	39	0	1	4
	小計	344	1,259	35	28	317	1,037	207	4	4	109
9	立神/長塩谷	58	171	8	21	58	171	56	0	0	2
10	月浜	83	245	33	20	83	245	79	0	1	3
11	吉浜	58	171	25	3	58	171	56	0	0	2
12	追浜	81	259	37	7	81	259	79	0	1	1
13	釜谷崎	26	110	22	1	26	110	26	0	0	0
14	二丁谷地	22	73	5	0	22	73	19	3	0	0
	小計	328	1,029	130	52	328	1,029	315	3	2	8
	合計	672	2,288	165	80	645	2,066	522	7	6	117

1. 仮設居住者による農業および食品加工支援事業



昨年に引き続き、2か所の畑で、野菜や花の栽培や販売、体験イベント、加工などの活動を行いました。

にっこりサンパーク仮設団地の住民さんが世帯ごとに耕す個人栽培の参加者が14世帯に増えました。仮設団地のすぐ近くの北上中学校の畑で、自分の家の食卓にのせる野菜を栽培し、冬の間もダイコンやネギを畑に埋めて越冬させ、有効に活用しています。「部屋にこもっていたおじいさんが畑に出るようになって、近所に野菜を配ったりするようになった」という家族からの感謝の声も寄せられました。

販売用の野菜を栽培する畑では露地とビニルハウスで、四季を通じて様々な野菜を栽培し、仮設団地での週1回の販売も台風の日以外は休まずに継続しています。農園の軽トラックを見つけると、お目当ての野菜を目指して駆け寄ってくる住民さんもいます。また、サイズが小さい、形が悪い、傷があるなどの理由で、そのままでは販売できない野菜を活用する方法として、乾燥させたり、カットしたり、惣菜にしたりして加工品として販売する試みにも取り組み始めました。そのための加工場を作業所兼休憩所の隣に設置し、それを管理運営していくため



切り干し大根の試作をするにっこり農園のメンバー

に一般社団法人新古里（にっこり）農園を設立しました。今後は、野菜の栽培・販売とともに、北上産の食材を使った惣菜や食事を提供できるよう取り組んでいきます。

農園の管理人の一人である佐々木さんは「氷点下5度でも青物をちゃーんと育てて、毎週売りに出してるってのはえらいっちゃ!!」と。今年から農園の活動に参加している山内さんは「農業や調理の仕事をやってみたかった。仕事はぜーんぶ楽しいです」とベテランのお母さんたちに混じって毎日張り切っています。

（東北農業事業担当 西村陽子）

（この事業はジャパン・プラットフォームの助成を得て実施しました。）

石巻市北上町復興支援ツアー



パルシクは北上町の復興支援を通し、人びとと地域に残る、知恵や文化、自然にふれ、魅了されてきました。復興の現状と同時に、農漁村の地域資源とその魅力を広く、多くの人に知っていただきたく、全3回のツアーを実施しました。延べ41名の方にご参加いただき、新たな出会いや交流が生まれました。

【第1回 漁業】7月3日～7日 出会いの旅

被災した漁村のいま—十三浜での被災体験と復興—

【第2回 農業】9月14日～9月15日 参加する旅

北上の農家生活を体験し、地元の食を楽しむ

【第3回 文化】10月19日～10月20日 学びの旅 地域に残る結の力

【座学編】復興はどこまでできたのか—石巻市北上町の復興とおして

（講師：宮内泰介氏、井上礼子）

2. 水産物の販売支援

パルシックは震災後の2011年から、宮城県石巻市北上町十三浜で、漁業分野の復興のご支援を継続して行ってきました。2012年に、十三浜の住民の方々から、地域活性化のため十三浜の水産物を販売するアンテナショップ設置のご要望を受け、昨年には店建物設置や店内什器等購入のご支援を行いました。このアンテナショップは「十三浜産直センター」という名称になり、昨年4月27日にオープンしました。オープン以来、店の運営費用等をご支援し、また、関係者の皆さんと協働で運営してきました。また、同センターを運営していく「十三浜産直センター運営管理組合」が組織されました。今後のセンターの運営について協議した結果、組合員の皆さんで運営費用を負担しつつ、引き続き協働で営業を行うこ

「十三浜産直センター」 オープンの日の様子



ととなっています。今後ともお近くにお越しの際はぜひお店にお立ち寄りください。（東北漁業事業担当 岩尾恒雄）

（この事業は、G2Asiaの助成を受けて実施しました。）

十三浜産直センター運営管理組合長 小山清さんからのメッセージ

震災後、相川地区の有志3名で、人口が減少している地域活性化のための施設をと、NPO法人パルシックさんに支援をお願いしました。県漁協十三浜支所より土地提供、北上町地域物産振興協会会員からの商品販売等の協力を得て、「十三浜産直センター」をオープンしました。当初は、被災地を訪れる人たちも多く、売り上げも伸びましたが、現在は訪れる人達も少なくなり、売り上げも減少しています。今後は、十三浜の産物等を活かしたイベントを企画するとともに生活必需品等を販売するなど、同センターの運営に取り組んでいきます。これまでのご支援に対し、深く感謝いたします。



復興の現在について考える集いを開催

東日本大震災の発生から3年を経た3月1日（土）に御茶ノ水にて「東日本大震災 復興の現在～石巻市北上町から見る～」と題した集会を開催しました。パルシックの石巻市北上町での事業報告とともに、自らも被災されながら

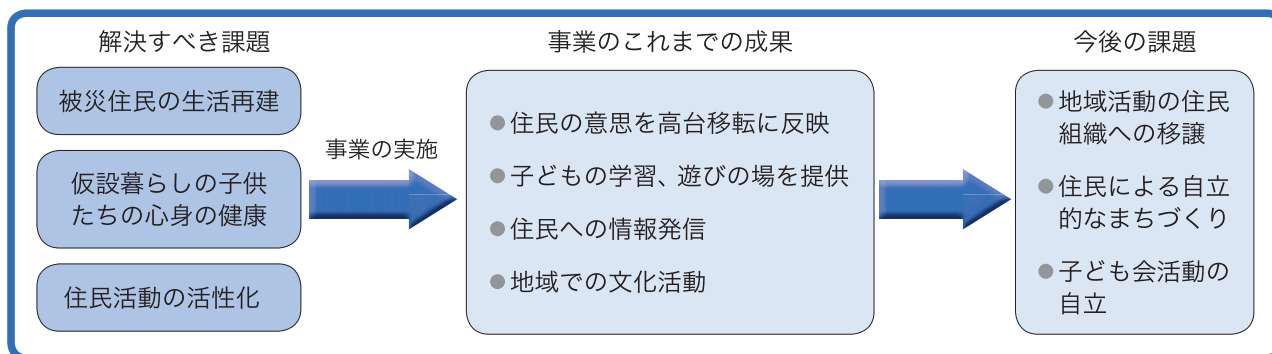


集会で北上町の復興の状況について話す3人のスピーカー

も各々の立場から地域の復興において重要な役割を担われている北上町の3名の方（宮城県漁業協同組合北上町十三浜支所運営委員長：佐藤清吾さん、石巻市北上総支所復興推進監：今野照夫さん、We are One北上代表/石巻北上復興応援隊：佐藤尚美さん）より、震災から現在までのお話をお聞きました。

震災から3年が経ちますが、当日の会場はまだまだ強く東北の状況に関心を持つ方々で満席となりました。集会后に記入していただいたアンケートでは、ほとんどの方から「北上の魅力を知りに現地を訪れたい」「今求められていることを何か支援したい」などの回答をいただくと同時に「佐藤尚美さんが話していた“復興とは、あれこれ建築したりして、もともとよりも便利な場所にするのではなく、普通に死ぬること”という言葉が非常に印象的だった」との感想もあがりました。被災地の現在の状況や今求められていること、復興とは何かについて考える、とても貴重な時間を持つことができました。

3. 復興応援隊の活動



2013年度も引き続き宮城県から復興応援隊事業*を受託し、5人の復興応援隊員が北上町の復興のために活動してきました。5人は各々の経験・得意分野を生かし、①子ども支援、②様々な地域のイベントのサポート、③住宅移転・まちづくりの支援、④かわら版の発行を行いました。2013年度に行った主要な活動の一部をご紹介します。

【地域でのイベント実施：子どもたちとのサマーキャンプ】

震災前は各集落単位の子供会で親子旅行やイベントを行っていましたが、震災後子供会の活動が止まり、現在もほとんどの



集落で復活していません。そこで、8月3～4日に親子で参加できるキャンプを企画しました。キャンプは、学年や集落を超えて交流できる貴重な場となりました。震災後突然に3校が合併したことでこれまで接点が少ない別学区だった親同士も距離を縮めることができ、とても良い活動となりました。次年度も行きたいとの要望があがっています。

(復興応援隊員 佐藤尚美)

【子ども支援：英会話教室の運営】

子どもたちに、学習支援の一環および学校外でのコミュニティの場を提供することを目的に、毎週1回4



クラスの英語教室を運営しています。現在、小中学生合わせて27名が参加しています。学年に合わせた内容で、次年度は児童英検にも挑戦しようと、内容を発展させていっています。課題としては、子供達が勉強した英会話を実際に使う機会を作れていないことです。今後、定期的に子どもたちが英語を使える機会をカリキュラムに入

れることができれば、子どもたちの楽しみが増えることと思います。

(復興応援隊員 佐藤尚美)

【町づくりの支援】

いまだ多くの住民が仮設住宅での暮らしを余儀なくされている中、高台移転を控えて、多くの住民は住宅の移転およびまちづくりについて



住宅の高台移転についてのワークショップ

強く関心を持っています。そうした住民の関心に応えられるよう、専門知識がなければ分かりづらい造成図面の情報を分かりやすく説明するなど、住民へのワークショップを開催してきました。ワークショップで出た意見をとりまとめて行政機関に提案として提出し、住民さんと行政をつなぐ橋渡しの役割も担っています。また、まちづくりの事例となるような場所を見学するバスツアーの企画も行い、住民が実際に見て自分たちのまちづくりの参考にできる機会も提供しています。見学に行くことが、住民のまちづくりへの意欲につながっているように感じます。

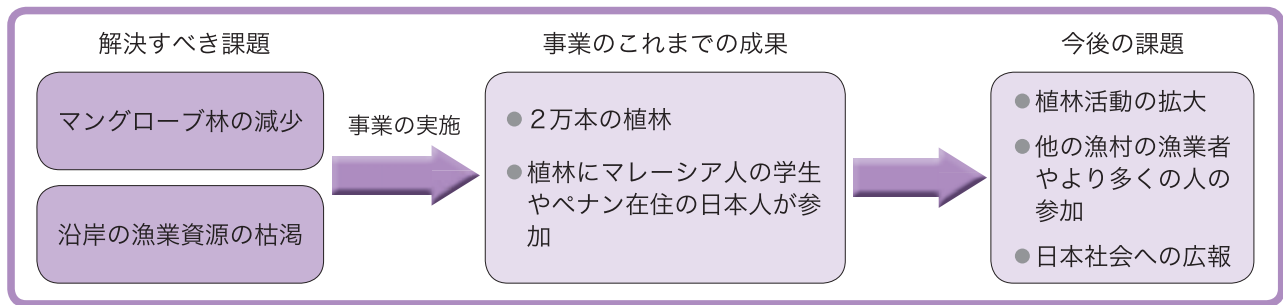
(復興応援隊員 遠藤博明)

【地域情報誌『北上かわら版』の発行】

今年も引き続き、全戸にかわら版を毎月配布しました。地域の近況や行事、伝統・文化についてなど地域内の多様な情報について取り上げて発信してきました。

*被災自治体が、被災地の復興と地域づくりを目的として住民主体の地域活動を促進するために地域内外から人材を募って「復興応援隊」として結成し、被災地の地域支援に従事・活動するものです。

ペナン島での植林事業の継続



2013年度のマレーシアでのPIFWA (Penang Inshore Fishermen Welfare Association: ペナン浅海漁民福利協会) とのプロジェクトは、植林活動だけでなく、漁民同士の交流と女性グループの組織化に活動を拡大しました。

マングローブの植林活動は、順調で既に2万本ほどを植林しました。9月には、ペナン在住の日本人への呼びかけを行い、約20名の参加者を得て教育センターでの植林を実施しました。参加者は、在マレーシア日系企業で働く人たちやその家族、長期滞在を目的として移住した人たち、あるいは、マレーシア人を含む家族の人たちで、保育園児から50代まで幅広い年齢層となりました。マレー系住民である小規模漁民と交流する機会は日常的



PIFWANITA のメンバー

にはあまりないため、植林という作業と同時に食事などをともにすることでお互いの理解を深めることができました。参加者からは「自然環境とのふれあいも、子どもたちにはいい機会であった」との感想もいただきました。

他方で、今年度からPIFWAは女性グループを再編成し、PIFWANITA (WANITAは、女性の意味) としての活動を開始しました。女性同士が集まる場としての機能や、副収入を得る機会を創ることなどが期待されています。これまでは男性中心だった植林活動にも女性グループが参加するようになっていきます。

課題は、小漁民の権利意識を高め、漁民同士が助け合って問題を解決する方法を見つけ出していくことです。ペナンには、PIFWAのメンバーのような沿岸小規模漁民が多いものの、工業や観光業が主要産業であるペナンでは漁業は重要視されず、大規模な養殖事業にとって代わられつつあります。一方で環境保全の意識が高まっており、植林は注目されています。植林と同時に、小漁民たちが生業をしっかりと維持していけるような活動を行うことが必要です。(マレーシア事業担当 大塚照代)

(植林事業はイオン環境基金、りそなアジア・オセアニア財団の助成を受けて実施しました。)



左上：ペナン島のマングローブ林の様子

左下：マングローブの植林に参加する在ペナン日本人の方々

各事業地との交流を深めるとともに、パルシック支援者を広げることを目的としたツアーも毎年の恒例イベントとして定着し、2013年度も3件のツアーを催行しました。ツアー毎にプログラム内容も多彩で、参加者同士の交流も深まる楽しい旅となりました。参加された方たちからさまざまな感想をいただきました。

東ティモール フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅

2013年7月29日～8月5日

コーヒーの実を摘んだり、果肉除去を体験したり、コーヒー農家の方のお話を聞いたり、村でコーヒーができるまでの過程を生で見て、体験できたことがすごく貴重でした。コーヒーができるまでに、様々な人・環境が関わっていて、それぞれの想いがある、やっと1杯のコーヒーになるのだと実感できました。村で飲んだコーヒーは格別においしかったです。日本では、当たり前のようにコーヒーが飲めるけれど、その当たり前の状況の影には、たくさんの方の力や想いがある、だから当たり前においしくいただけることに感謝しようと心から思いました。
(小野明日美さん)

コーヒー集落で、農家の方と
収穫作業を体験



キングココナッツを飲む参加者の方たち

スリランカ ジャフナ 復興に取り組む人々と触れ合う旅

2013年8月18日～25日

北部スリランカは、津波と内戦が最近まで実際にあって、傷跡はまだ残っている。寡婦で子育て中の方も多し。多くの人が死亡、村も焦土と化していた。都会などは表面的に平和となったように見えるが、復興はまだ途上であることを学んだ。スリランカは、海や夕日がきれいで、祭り・行事が盛ん。活気もあり、まさに発展途上にある国、できればこの美しい国が、二度と戦火災害に見舞われることなく平和に発展していくことを祈ってやみません。
(山森茂樹さん)

スリランカ 南部ルフナ おいしい紅茶のルーツを訪ねる旅

2013年12月26日～2014年1月2日

紅茶に関する書籍を読むことで、確かに知識を得ることはできるが、ツアーに参加し、実際に目で見て体感することで、より深い学びにつながったと思う。これからはただ有名な“セイロン紅茶”としてではなく、交流会で出会った紅茶農家のメンバーさんたちが一生懸命つくる様子が目に浮かぶ。紅茶を大切に飲まずにはいられないと思うようになった。このような機会を得られたことを本当に感謝しています。
(吉武恵美子さん)



茶摘み体験をする参加者の方たち

フェアトレード

パルシックはフェアトレードを「地球上に暮らす人びとが、対等、平等に生きることのできる社会を作りあげていくためのプロセス」と考えています。2012年度に続き、コーヒー、紅茶ともに生産量が大幅多く、在庫が豊富です。生産地から受け取った商品を販売して初めて、持続可能なフェアトレードが成り立っているといえます。そのため、2013年度は増えている在庫に販売が追いつけるように努めてきました。売上高は増えていますが、フェアトレード部門が「パルシックの財政の柱」となり、民際協力部門を支えていくという課題はまだ達成できていません。商品の美味しさ、その背景にあるストーリーを多くの方と共有させていただけるように、引き続きチャレンジを続けていきたいと思ひます。

コーヒー

生豆の卸売り金額は2012年度から1.5倍以上増えました。企業のCSRとして「カフェ・ティモール」の新規取扱い、大手レストラン・チェーンによる購入、新しい焙煎屋さんとの出会いに恵まれた事が要因です。また地方のフェアトレード関係のイベントや、映画「カンタ！ティモール」の上映会での商品委託販売も増えました。今後多くの方々との広い分野で繋がって、ネットワークを広げていきたいと思ひます。東京事務局でも、コーヒー専門家を招きカップングの勉強会の実施、焙煎所の見学など、営業強化のための勉強を重ねました。



カフェ・ティモール



アールグレイ紅茶

アールグレイ紅茶

2013年4月から開始したアールグレイ紅茶の販売。何よりもまず、お客様にその美味しさを知っていただきたいと、個包装のサンプルをイベント参加者、小売りのお客様、会員などに合計25,000個配布しました。その成果もあり、幸いに個人のお客様のご購入が増えてリーフタイプ、ティーバッグ合計約5,000袋を販売しましたが、輸入量には遠く及ばず、課題が残りました。

アロマ・ティモール

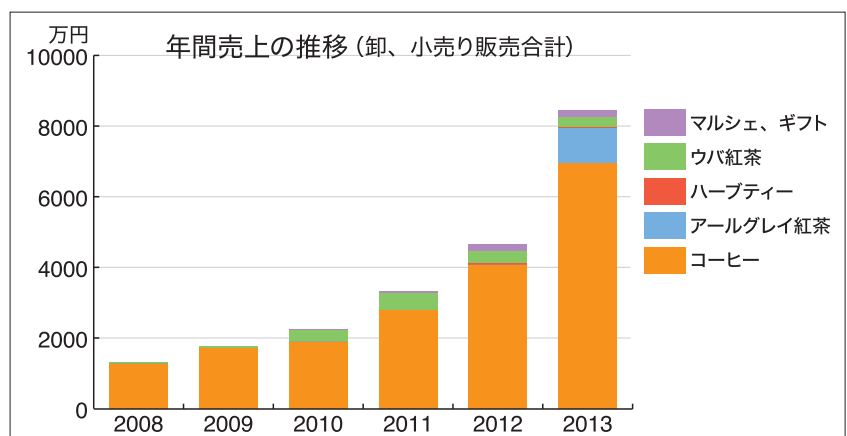
ハーブは今まで生産量が少なかったこともあり、インターネット販売が主でした。東ティモールの女性達の努力もあり、近年は生産量が安定してきました。それを受けハーブ専門店や企業へ、材料としてのハーブ卸販先を見つけたいと営業をはじめました。現地では昔から伝統薬として重宝されてきたハーブ類を、美味しさと、その健康面からもご紹介をしていきたいと思ひます。



アロマ・ティモール

ウバ紅茶

2013年度は新しい生協での取り扱いも開始されました。紅茶好きの方に好まれ、安定した売れ行きを示しています。



ソーシャルプロダクツ・アワード2014受賞

パルシクのアールグレイ紅茶が『ソーシャルプロダクツ・アワード2014』で「特別賞」を受賞しました。紅茶の有機転換のプロセスや環境への影響などの「仕組み」が高く評価されました。「つくる人にも飲む人にも、そして環境にも優しい紅茶」として、同時にその美味しさを多くの方に知っていただけるよう、営業・広報を強化していきます。



ソーシャルプロダクツ・アワード受賞式会場

FOODEXでの出展

3月4日～7日の4日間、国際食品・飲料展「FOODEX 2014」に出展しました。スリランカで「アールグレイ紅茶」のパッケージングをしているスリランカの紅茶会社JC Enterprises.と共同での出展でした。ブース内は、終日アールグレイ紅茶のベルガモットの香りが漂っていました。このような企業間取引に限定された出展はパルシクとしては初めてで、出展示中は大勢の方にブースにお寄りいただき、新しい出会いに恵まれました。



FOODEXでのパルシクのブースの様子

淡路町マルシェ

東京事務所の一角に2012年オープンした淡路町マルシェは1年半が経ち、徐々に固定客が増えてきました。商品もオープン当初より充実し、パルシクのコーヒー・紅茶をはじめ、週2回入荷する有機野菜、活動を通じてつながりのある団体のクッキーやワッフル、オリーブオイル、ジュースなど取り揃えています。これまでは、自由学校の生徒さんやご近所さんが主なお客様でしたが、最近は、近所のサラリーマンやOLの方がお昼休みにふらっとお立ち寄りくださったり、インターネットでわざわざ検索して来てくださったりします。淡路町マルシェは、人と人のつながりを大切にするパルシクの考え方を伝える、とても良い場になりつつあります。お近くへお越しの際は、ぜひ『淡路町マルシェ』にお立ち寄りください。



淡路町マルシェ

季節のギフトセット

クリスマスプレゼントやお歳暮、バレンタインなど、季節のイベントに合わせてパルシクのフェアトレード商品をギフトセットにして販売しました。新たな取り組みとして、昔からの知人が手掛けるワッフルのアールグレイ紅茶味を製作し、カフェ・ティモールやアールグレイ紅茶をセットにしました。昨年のアドバイザー派遣での経験を応用し、Web広告を通じて、新規顧客取得のための施策を行いました。

販売数はまだまだ少量であるものの、これまでの販売層以外のお客様にもフェアトレードやパルシクの活動を知っていただける良い機会になりました。

オンラインショップのリニューアル

2012年にハーブティー、2013年にアールグレイ紅茶を販売開始し、パルシクのフェアトレード商品はだんだんとラインナップが増えてきました。それに伴い、オンラインショップの利用者も年々増え、使い勝手やデザイン面での改善が必要になってきました。

現状のオンラインショップの見直しを進めるにあたり、この機会に、2008年からスタートしたパルシクの団体としてのデザイン統一も行うこととなり、団体ロゴを刷新しました。新しいロゴは裏表紙をご覧ください。オンラインショップも装いを新たに、2014年春頃にリニューアルいたします。使いやすく、見やすくなったショップを、ぜひ楽しみにしててください。

2013年度は、2012年度に引き続き、広報の強化に力を入れ、WebサイトとSNSを連動させたこれまでの情報発信に加え、フェアトレード商品のギフト展開や新しい広報ツールの導入を積極的に行いました。

WebサイトとSNSの連動した情報発信

2012年にシステムの改修を行ったWebサイトは、各スタッフが積極的に情報発信ができる仕組みとなり、事業レポートを定期的に掲載しました。それと連動して、各事務所からのfacebookを使った情報発信を強化し、ブログの記事にするほどでもないような、小さな活動の一部をご紹介します、フォロワーとのコミュニケーションを図ったり、イベント情報を拡散したりして、ファンを増やしました。

パルシックが運営しているfacebookページ

- 特定非営利活動法人パルシック / PARCIC <https://www.facebook.com/parcic>
- 東ティモールTimor Leste_PARCIC <https://www.facebook.com/parcic.timorleste>
- 石巻市北上町ファン部 <https://www.facebook.com/kitakamifanb>
- 北上 十三浜産直センター <https://www.facebook.com/13hama.center>



パルシックのfacebookページ

JustGiving Japanでの寄付チャレンジ

facebookやインターネットを使ったファンドレイズの仕組みにも新たに取り入れられました。

企業と連携したクリック募金の仕組み「gooddo」は、特定のページを訪れてクリックしたり、協賛企業のfacebookページに「いいね!」をするだけで、クリックの量に応じてパルシックが寄付金をいただけます。パルシックの投稿が、企業の支援によりfacebook広告に出稿されるので、パルシックという団体を知らない人へ情報が届く確率が上がり、着実にファンを増やしています。

インターネット上でチャレンジを立ち上げ寄付金を募る「Just Giving」では、スリランカ ムライティブ県の子どもたちへ文具を送るための寄付金募集を行いました。目標金額を50万円に設定し、19名の方々がご支援くださり、目標金額を達成できなかったものの、このチャレンジだけで総額135,500円もの寄付金を集めることができました。この他に、直接的なご寄付も合わせると、ほぼ目標額の482,140円に達しました。

子どもたちに文具を送るための寄付を募る JustGiving サイト



国際協力ニュース

活動地の状況やパルシックの活動を会員、サポーターズ、寄付者、フェアトレード商品の購入者の方々にご紹介するニュースレター「国際協力ニュース」は、事業や商品が増えたこともあり、冊子のボリュームをこれまでの2倍にして、6月と12月に発行し、半年間の活動の進捗情報をお届けしました。

イベントでの出店

2013年度は、新しい層のお客様にパルシックを知っていただくことに重点を置き、これまで毎年出店してきたイベントへの参加を控え、新たな出会いがありそうなイベントへの出店を行いました。お客様との様々な出会いはもちろん、出店者同士のコミュニティも広がり、今後の活動に生かしていきたいと思えます。

グローバルフェスタでの出店



アールグレイ紅茶発売記念イベント

2011年よりスリランカ南部のデニヤヤで開始した小規模紅茶農家支援で生産された紅茶が、アールグレイ紅茶のフェアトレード商品として日本で販売を開始しました。それを記念して、事業担当の高橋が販売までの道のりや、紅茶専門家がアールグレイ紅茶の背景やおいしい入れ方をお話しました。

アールグレイ紅茶は販売開始以来とても好評で、テレビ番組に取り上げられたり、ソーシャルプロダクツ賞をいただいたりと、注目を集めています。

2013年度 参加イベント

4月7日	ムジカ東北復興支援ライブ
4月20、21日	アースデイ東京 2013
6月1日	Gospel For Peace
6月21日	ワテラスマルシェ
6月19~23日	Qマルシェ
10月5、6日	グローバルフェスタ
10月10日	しんゆり映画祭
10月20日	土と平和の祭典
11月10日	にやりフェス
11月23日	国際有機農業映画祭

フィリピンでの社会的連帯経済ネットワーク会合(RIPESS)に参加

2013年10月15日から18日までフィリピンのマニラで「社会的連帯経済を推進する大陸間ネットワーク (RIPESS) 世界会合」が開催されました。大陸間を横断して連帯経済について話し合う同会合は4年に一度、アジア地域内でのアジア連帯経済フォーラムは隔年開催されています。同会合には、世界中のオルタナティブ経済の実践家、研究者、活動家など600名以上が集い、各地での社会的連帯経済の実践事例を発表して他の参加者に経験の共有をするとともに社会的連帯経済の定義や今後の在り方について話し合いました。会議の最後には、現在の国連ミレニアム開発目標(MDGs)に代わる、2015年以降の開発目標(「ポスト2015」)に向けての提言も立案され、4日間という短い



マニラでの連帯経済ネットワーク会合の開会式

間に多くの話し合いがなされました。今回のRIPESS会議には、パルシックからジャフナ事務所のプラバと東京事務所の西森が、姉妹団体パルクの田中滋氏とともに参加し、ジャフナでの干物事業とサリー・リサイクル事業の取り組みを紹介しました。

パルシックの各地事務所のスタッフたち

パルシックの各事業地の事務所で働くスタッフの写真を掲載します。
2013年度は、各地で総勢51名のスタッフがパルシックの事業を担ってきました。

東ティモール事務所

東ティモールでは、首都のディリと、事業地のマウベシに事務所を設置しています。マウベシでは、コーヒー事業のほか、循環型農業事業、女性たちによるハーブ事業を行っています。



ディリ事務所



マウベシ事務所
(女性チーム)

マウベシ事務所
(農業チーム)



スリランカ事務所

スリランカでは、北部のジャフナとムライティブ、および有機紅茶の転換事業を行っている南部のデニヤヤに事務所を設置して事業を実施しています。中心都市のコロンボにも事務所を置いていますが、現在常駐するスタッフはおらず、コロンボでの行政機関訪問など必要ときに滞在・使用しています。



←
デニヤヤ
事務所



→
ムライティブ
事務所



→
ジャフナ
事務所

東京事務所



東京事務所

東京では、小さなスペースながら事務所の一角にマルシェを開き、パルシック製品や有機野菜を販売しています。

東北事務所

東北では、宮城県石巻市北上町に事務所を設置し、農業・水産支援事業と復興応援隊が活動しています。

復興応援隊



北上事務所



パルシック2013年度活動暦

月	日本(東京事務局と石巻市北上町)	東ティモール	スリランカ D=デニヤヤ、J=ジャフナ、M=ムライティブ
4月	27日 北上町で海産物を取り扱うアンテナショップ(「十三浜産直センター」と名称)をオープン		D: 新規参加農家10世帯が加わり、合計60世帯となる
5月		27日～6月7日 御園孝さん、小野俊英さんによる養蜂指導第1回	21～22日 D: デニヤヤ市環境保護推進イベントに出店し、紅茶を販売
6月	15日 パルシック会員総会 1～2日 シンガポールからの修学旅行生を北上町に受け入れ	30日 循環型農業事業1年次終了 マウベシでコーヒーの収穫開始	24～28日 M: マリタイムパットゥ郡の3漁協の有志メンバーとスリランカ国内4県の漁業関係者を訪問する研修旅行を実施
7月	6～7日 石巻北上町復興支援ツアー(第1回: 漁業)の開催 15日 北上町の十三浜産直センターでウニ祭を開催	14～26日 有機認証検査 29～8月5日 「フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」を実施 サココでコーヒーの収穫開始	J: JICA ボランティア3名が3か月間ジャフナで女性グループにサリー製品の縫製および食品加工を指導 D: 茶畑の肥沃度成分検査実施
8月	6日～9日、20日～23日 北上町事業地に法政大学学生ボランティアの受入れ 10～11日 北上町白浜海水浴場の海開きを復興応援隊が支援		18日～25日 J・M: スタディツアー「復興に取り組む人びとと触れ合う旅」を実施 25日～31日 国連人権高等弁務官ピレイ氏が北部を訪問し、政府に内戦被害者・行方不明者への支援と調査を要請 31日 M: マリタイムパットゥ郡で18基の井戸が完成
9月	4～6日 北上町産直センター運営メンバーと山口県萩市周辺道の駅等への視察旅行を実施 14～15日 石巻北上町復興支援ツアー(第2回: 農業)の開催	循環型農業事業2年次開始(～2014年8月末まで) 16日～第一次コーヒーの出荷準備開始	1日 M: マリタイムパットゥ郡の漁村復興支援事業を開始(2014年8月まで) 21日 北部・中央・北西部州議会選挙が実施され、内戦後初の州議会選挙となった北部州ではタミル系政党(TNA)が圧勝 28日 D: 新規参加農家に混植用植物苗を配布、茶摘み研修の実施 30日 J: ジャフナ県乾燥魚事業の終了
10月	15～18日 連帯経済フォーラム(RIPESS)に東京事務所とスリランカ事務所から参加 18～19日 石巻北上町復興支援ツアー(第3回: 文化)の開催	1日 女性事業開始(JICA草の根技術協力事業で2018年9月まで実施) 5～18日 御園孝さん・小野俊英さんによる養蜂指導第2回	1日 J: 持続可能な漁業のための養殖導入事業の開始(3年間) 13日 D: 5トンの紅茶を日本へ出荷
11月		3日 第一次コーヒーの出荷(アラビカ24.5トン、ロブスタ29トン)	15～17日 英連邦首脳会議がコロンボで開催
12月	9日 シネマカフェ Vol.1の開催 22日 北上町での復興市に復興応援隊が参加 北上町の農作業休憩所に食品加工所を設置		D: コロンボ市内グッドマーケットで国内向け紅茶の販売開始 26日～1月2日 D: スタディツアー「おいしい紅茶のルーツを訪ねる旅」
1月		7日～ 第二次コーヒーの出荷準備開始 27日 女性事業キックオフ会合	26～27日 D: 参加型有機認証監査
2月	20日 北上町での農業・食品加工事業で、一般社団法人新古里農園を設立 農園作業所に厨房設備設置完了	2～11日 桑原衛さんによるバイオガス、養蜂指導	D: 参加型有機認証取得、堆肥配布 17～28日 J: 北窓時男さんによる養殖事業地調査
3月	1日 東北復興の現在について考える集いを開催 4～7日 FOODEXに出展し、アールグレイ紅茶などの商品を紹介 11日 東日本大震災より3年 25日 北上町の産直センターで販売するわかめ・昆布の統一パッケージが完成	8日 第二次コーヒー&ハーブ出荷(アラビカ27トン、ハーブ106.6kg)	J: 土産物店ペアフット(ゴール店)でサリーリサイクル製品の販売開始 29日 西部州・南部州議会選挙



- 地下鉄 A5 出口から徒歩 2 分
都営新宿線・小川町／丸ノ内線・淡路町／千代田線・新御茶ノ水
※いずれの駅も地下でつながっています。
- JR・御茶ノ水駅、聖橋口から徒歩 6 分

特定非営利活動法人 パルシック

PARCIC

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-7-11 東洋ビル

Tel : 03-3253-8990 Fax : 03-6206-8906

Email : office@parcic.org

Web : <http://www.parcic.org>

Twitter : http://twitter.com/parcic_office

Facebook : <http://www.facebook.com/parcic>